

成人女子用既製衣料品の適合性について

On the Fit of Ready-Made Women's Garments

(1991年4月3日受理)

三田 利子 近藤 信子 大橋登史子 矢部 寿重
Toshiko Mita Nobuko Kondoh Toshiko Ohashi Hisashige Yabe

Key words: 成人女子用既製衣料, 体型認識, 仕立て上がり寸法

1. 緒 言

消費の高度化, 多様化, 高級化という志向が指摘されており, 既製衣料品の材料, サイズの種類, デザイン等も豊富になってきた。消費者にとっては, 自己の個性や感性に合った, しかも体型にフィットする被服の選択が, より可能になったといえよう。既製衣料品の着心地に対する満足度は個人によって異なるが, 最も問題なのはサイズだといわれている。サイズの適合については多くの問題が提示されており, 現実に既製衣料購入時のサイズ直しが多いことは, 一般に認めるところであろう。

これら既製服の設計, 製作, 着用の基礎となる衣料のサイズ規格については, 昭和60年11月1日付でJIS L 4005 (成人女子用衣料サイズ) が改正され, 昭和62年秋冬物の製品から改正規格に基づくサイズ表示に切り換えられた。しかし, 改正後2年目に著者らが行った調査では, 既製服メーカーおよび販売業者で, 新しいサイズに基づく表示を採用したものは比較的少なかった。また, 被服への関心度が一般に高いとされている女子短大生のサイズ表示法に対する関心も低く¹⁾, 新しいサイズ表示が多くの消費者に浸透するまでに, さらに時間がかかると思われる。

今回の規格の改正点では, サイズピッチを広げることにより, 出来るだけ少ないサイズ数で広いカバー率をもち, 多くの人にフィットし, 成人女子の体格により対応するよう改めたことをあげている²⁾。そこで, 特にフィット性を必要とする成人女子用既製服を購入する場合, その適合性を確保するためのポイントは何かに興味を持つとともに, 「ぴったり」であるとはどのような内容かを調べようとした。本研究では, 消費者の立場からの適切な対応法となる身体寸法と自己体型の認識について調査する一方, 試着により既製服のもつ問題点についても検討した。

2. 身体寸法と自己体型の認識

2.1 調査方法

1990年5月に本学学生197名を対象に, ①自己の身体寸法, ②自己の体型, ③自己の体つき(肥瘦意識)に関する認識について調査を行い, その後197名の身体計測を実施した。計測方法は, 「日本人の体格調査」³⁾に基づき行った。

2.2 結果および考察

(1) 自己の身体寸法の把握と身体計測寸法

既製衣料がJIS規格に示された基本身体寸法を基礎として仕立てられているのであれば、適合性の高い既製服を得るためには、自己の身体寸法を正しく認識していることが重要な条件である。そこで現在認識している身体寸法（認識寸法とする）の身長・胸囲・胴囲・腰囲・体重の5項目について調べたところ、5項目すべてについて記入した者は168名であった。自己の寸法がよくわからないということから記入しなかった29名の未記入項目の内訳は、次のとおりである。胸囲のみ2名、腰囲のみ15名、体重のみ1名、胸囲と腰囲2名、腰囲と体重2名、胸囲と胴囲と腰囲2名、胸囲と胴囲と腰囲と体重5名で、腰囲の寸法を認識していない者が最も多かった。ただし身長については全員の記入がみられた。以上のように、既製服にサイズ表示されている基本身体寸法でさえ把握していない者がおり、これらの者については、購入時試着に頼らざるを得ないことがうかがわれる。

次に、5項目すべての記入が得られた168名の認識寸法と身体計測結果（計測寸法とする）との比較を行った。認識寸法と計測寸法の間には、項目によってその認識に偏りがあり、周径方向の寸法はやや小さめに、体重も小さめに記憶していたが、これら4項目に有意な差はみられなかった。また、身長についてはほぼ正確に記憶されており、平均値でみるかぎり、168名については自己の身体寸法をほぼ正確に把握しており、身体寸法に対する意識の高さがうかがえる。

ファッションへの関心が高いとされる女子学生を対象としているため、このように自己の身体寸法に対する意識の高さがうかがえたものの、腰囲を記載しなかった者がやや多かった事からみると、JISに表示されている体型（A, Y, B）の認識には不十分さが考えられる。このことは次項で述べる過度な瘦身意識ともかかわりがあるように思われる。

これら168名の身長・胸囲・胴囲・腰囲の計測寸法について、日本人の体格調査報告書³⁾の全国値（19歳値）と比較したところ、身長、胸囲において0.1%の危険率で、腰囲においては5%の危険率で有意な差が認められたが、胴囲では有意な差はみられなかった。したがって、全国平均よりもやや背が高く、胸囲と腰囲の大きい集団である。

(2) 身体寸法と自己の体型および体つきの認識

既製服のサイズ表示が変わったことを知っていた者は28.2%で、これは前回の調査結果¹⁾（21.7%）よりは高い率である。しかし、その内、サイズ表示に用いられている3通りの体型区分（A・Y・B）について理解している者は6名にすぎず、新JIS規格サイズの呼び方について、今後の学習の必要性を強く感じた。

次に、自己の体つきに対する意識を、「痩せている」「やや痩せている」「普通」「やや肥っている」「肥っている」の5段階で評価してもらったところ、「痩せている」と評価した者は全体の7.1%、「やや痩せている」と評価した者は8.9%、「普通」と評価した者は36.9%、「やや肥っている」と評価した者は27.4%、「肥っている」と評価した者は19.8%であった。肥瘦意識と自己寸法とのかかわりをみるため、身体計測項目について肥瘦意識別に、平均値、標準偏差を算出した（表1）。これによると、「肥り」の意識が強くなるにしたがって、胸囲・胴囲・腰囲の周径および体重の平均値は増加しており、「肥っている」と意識しているグループの平均値が最大となっている。この4項目のそれぞれについて肥瘦意識別に平均値の差の検定を行ったところ、胸囲・腰囲・体重については「やや痩せている」「普通」「やや肥っている」「肥っている」と意識するグループの間で、胴囲については、「痩せている」「普通」「やや肥っ

表 1 肥瘦意識別身体計測値

(cm)

自己意識 計測項目	瘦(n=12)			やや瘦(n=15)			普通(n=62)			やや肥(n=46)			肥(n=33)	
	\bar{X}	S.D.	t	\bar{X}	S.D.	t	\bar{X}	S.D.	t	\bar{X}	S.D.	t	\bar{X}	S.D.
身長	156.67	6.82		158.67	4.24		157.00	6.23		157.07	5.20		158.68	5.56
胸囲	77.75	2.95		79.20	2.51	*	81.03	2.74	***	84.05	3.03	*	86.81	6.10
胴囲	58.08	1.85	**	59.87	1.20		60.76	2.38	***	63.72	2.09	***	67.36	5.15
腰囲	82.70	1.85		83.53	3.77	**	86.91	4.06	***	90.76	2.49	***	93.71	4.10
体重	43.00	3.67		44.60	3.61	*	47.89	4.87	***	52.65	4.57	***	58.20	8.21

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

ている」「肥っている」と意識するグループの間で有意差が認められている。一方、身長⁵の5段階の平均値に有意な差はみられず、最大平均値と最小平均値との差もあまりない。したがって、「肥り」の意識が強くなるほど、胸囲・胴囲・腰囲が大きくなり、体重が重くなる傾向が認められるが、身長においては著しい差はないといえる。平均値に対する相対的なばらつき⁶の大きさについてみると、「痩せている」から「やや肥っている」と意識するグループでは身長⁵の標準偏差が、「肥っている」と意識するグループでは体重⁷の標準偏差が最も大きくなっている。

表 2 肥瘦判定と自己意識

(人)

自己意識 肥瘦判定	瘦	やや瘦	普通	やや肥	肥
痩せすぎ	9	10	7		
痩せぎみ	3	4	26	2	1
普通		1	35	37	19
肥りぎみ				6	6
肥りすぎ				1	7
計	12	15	68	46	33

次に、肥瘦評価の判定資料として、厚生省指導による身長と体重を基準として作製された「肥満とやせの判定図⁴⁾」を使用して、今回の調査で得られた肥瘦意識別身体寸法と、栄養学的に判定される肥瘦度との比較をした(表2)。比較に用いた身体寸法は身長と体重である。

これによると、栄養学的に、「肥りぎみ」あるいは「肥りすぎ」と判定される者は20名であるにもかかわらず、自己の体つきに対して「肥り」の意識をもつ者は79名もみられた。同様に自己の体つきに対して「痩せ」の意識をもつ者は27名であったが、その内「痩せすぎ」と判定される者は19名もみられたことから、普通体あるいは瘦身体であってもさらに痩せたい願望が強いことがうかがえる。このように、調査対象者の瘦身志向が顕著であることが明らかとなったが、過度な瘦身意識をもつことは、健康の視点からは要注意であることが示唆される。

なお、この事は、既製のサイズ表示に採用されている体型に対する選択を誤る可能性をもつものとも考えられる。

それでは身体各部位の“気になる”サイズはどれくらいを示すのであろうか。「背の高さ、ウエストの太さ、ヒップの太さが気になりますか。」という質問に対して、「気にならない」「やや気になる」「かなり気になる」の3段階で答えてもらった。

「気にならない」と「かなり気になる」と答えた者についての計測寸法の平均値と標準偏差(表3)

の比較を行うことにする。

身長については、「気にならない」者に比べて「かなり気になる」者の平均値は小さく、背の低さを気にしており、160cm位の身長を望んでいる。胴囲、腰囲については太さを気にしており、胴囲については、新JIS規格サイズのウエストの基準値63cmよりも小さい値を、腰囲については、Y体型のヒップの基準値86cm（3体型の中で最も小さい基準値）よりも小さい値を望んでおり、このことから瘦身志向がうかがえる。

新JIS規格サイズでは、A体型を普通体型とし、それよりもヒップが4cm小さい者をY体型、4cm大きい者をB体型と区分けしているが、先に述べたように、調査対象者の体型に対する認識は低く、これは3元単数表示の組み合わせについて理解されていないためと思われる。

そこで、自己の体つきに対する意識と体型3区分との関連がみられるのではないだろうかと考え、表4を作成した。

それによると、「肥っている」と意識する者の内の多くはA体型で、B体型に入る者は1名しかみられなかった。「やや肥っている」と意識する者についても半数以上がA体型に区分けされる。同様に全体をみると、体つきに対する意識と体型とは必ずしも一致しておらず、自己体型がJIS規格サイズで普通とされているA体型であっても「肥り」の意識が強く表れている。

(3) 身体寸法の既製衣料サイズの適用範囲

今回得られた資料（調査対象者の計測寸法）をもとに、本調査対象者の既製衣料サイズの適用範囲を検討した。肥瘦意識別に3元単数表示サイズの適用範囲にある者をとりあげると、各欄の出現状況は表5に示すとおりである。その結果、168名の50%にあたる84名の者が、JIS規格サイズの適用範囲にいたることが示され30種のサイズ欄（全サイズ欄は55種）に出現した。対象者の多くがほぼ同一年齢という特定集団であることから、全サイズ欄へは出現しなかったと考えられる。

体型別にとらえると、A体型31.0%、Y体型12.5%、B体型6.5%の50.0%がJIS規格サイズの適用範囲にいたることがわかった。

肥瘦意識別では、「普通」と意識する者がJIS規格サイズでカバーできる適用範囲に最も多くみられ、グループ内でのカバー率は62.9%であった。「やや肥っている」と意識するグループもカバー率63.0%となり、「普通」と意識するグループとほぼ同率であった。両グループに比べ、「痩せている」「やや痩せている」「肥っている」と意識するグループの内、適用範囲にいる者は少なく、自己寸法に“ぴったり”した既製服をもとめることが難しいと考えられる。

表3 “気にする”自己寸法 (cm)

身体部位	気にならない		t	かなり気になる	
	\bar{X}	S.D.		\bar{X}	S.D.
身長	159.48 (n=70)	4.09	***	154.42 (n=48)	8.36
胴 囲	60.04 (n=28)	1.82	***	63.93 (n=94)	4.70
腰 囲	85.08 (n=26)	3.47	***	90.51 (n=55)	4.50

*** $p < 0.001$

表4 肥瘦意識別体型区分 (人)

自己意識 体 型	瘦	やや瘦	普通	やや肥	肥
A 体 型	2	3	24	18	5
Y 体 型	1	1	12	4	3
B 体 型			3	7	1
計	3	4	39	29	9

さらに、被服の「ゆとり量」でカバーできると思われる身体寸法（ヒップの基本寸法と定められている数値の-1cm, +2cmの範囲）の者もとりあげて、JIS規格サイズの適用範囲をとらえると64.3%のカバー率を示しており、「普通」と意識するグループでは62名中51名が適用範囲におり最も高いカバー率を示すことから、この意識グループの者は、比較的、自己寸法に“ぴったり”した既製服をもとめ易いと思われる。

本学学生の半数の者が3元単数表示のサイズでカバーされることが示されたが、これは30種のサイズ欄に出現する者すべてをとりあげた率である。ところが先に報告したとおり、小売店の多くは9ARサイズ中心に品揃えしており⁵⁾、9ARあるいはその周辺のサイズだけをとりあげるならば、カバー率は相当低くなると思われる。

被服には「ゆとり量」が加わっていることから、9ARサイズでカバーできる範囲が一つ隣のサイズ(7AP, 7AR, 7AT, 9AP, 9AT, 11AP, 11AR, 11AT)までに及ぶとして、JIS L 4005の確率密度分布⁶⁾からカバー率を算出したところ、9ARサイズの既製服でカバーできる日本人成人女子の割合は、このように幅をもたせても、10.8%にすぎないこととなる。しかし現実には、このような低いカバー率であるとは考え難い。表5をもとに、同様なサイズ範囲のカバー率を算出したところ25.6%を示した。さらに、被服の「ゆとり量」でカバーできると思われる身体寸法の者もとりあげて、同様にカバー率を算出したところ31.0%であった。購入時にサイズ直しをすることや、デザイン・色柄が気に入れば、多少きつくてもゆるくても買うという消費者の購買行動も指摘されていることから⁷⁾、確証はないものの10.8%を大きく上回る31.0%というカバー率はあり得ることと考えられる。

表5 身体寸法の既製衣料サイズ適用範囲

体 型	バスト (呼び) 身長	73	76	79	82	85	88	92	96	100
		(3)	(5)	(7)	(9)	(11)	(13)	(15)	(17)	(19)~
A体型	148 (P)		△ ◎	○	○○ ×	○○				
	156 (R)		▲	◎◎◎◎◎ ◎◎◎◎◎ ◎◎◎◎◎ ○ ×××××	◎◎◎◎◎ ◎◎◎◎◎ ◎◎◎◎◎ ○ ××	◎ ○ ●	●●●		●	
	164 (T)		△	▲ ◎◎◎ ○ ×	▲ ◎◎◎ ×	◎◎◎◎ ○ ○	○			
Y体型	148 (P)		◎	△ ◎◎ ○	◎	◎ ××	×			
	156 (R)			▲ ◎◎	◎◎◎◎◎ ◎◎◎◎◎ ××××× ×	○ ×××××	○ ●	○	●	
	164 (T)				××					
B体型	148 (P)		◎			●				
	156 (R)			◎◎ ○	○○○○					
	164 (T)				○○					

肥瘦意識の程度：△瘦、▲やや瘦、◎普通、○やや肥、●肥、×ゆとり量でカバーできる身体寸法

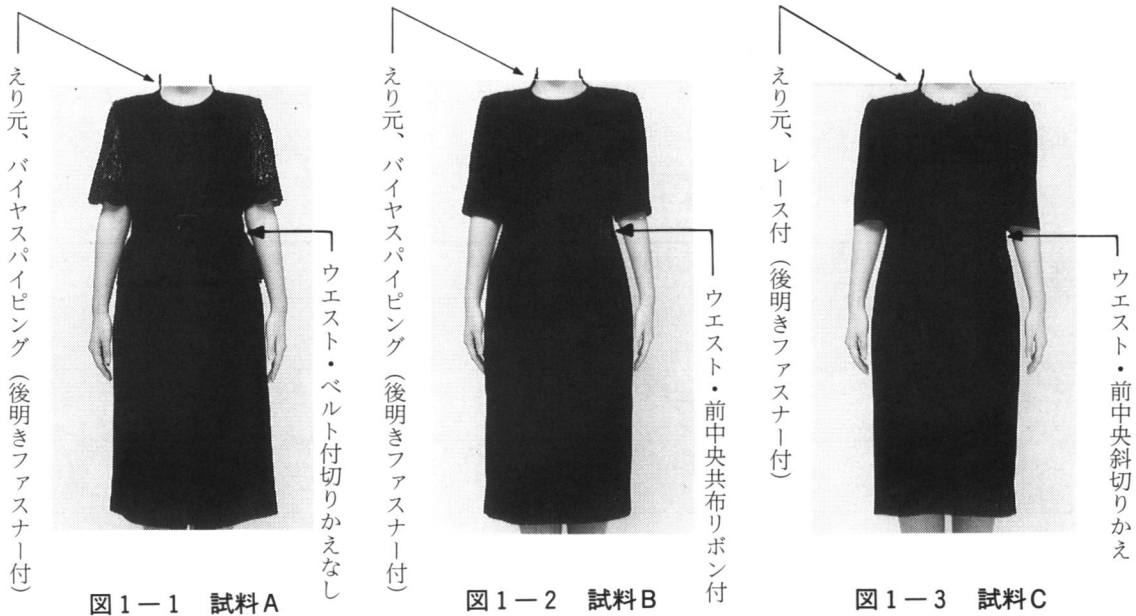
3. 試着実験

3.1 研究試料

下図3枚を実験試料とした。

図1-1に示したワンピースドレスは、自己の身体寸法を把握している消費者が、適合性は十分であろうと期待して購入した既製服で、着心地に問題がある製品である。日常9ARサイズの既製服を着用している本学学生が平成2年9月中旬に購入し、一回着用したが「手が挙げにくい、肩が重い」などの不満があった。消費者の既製服選びが表示サイズのみならず、試着して購入する者が多いことは、すでに報告¹⁾したが、これは基準となる3サイズの他に着心地に関する他のファクターが存在する可能性を示唆しているようにもみえる。

そこで、今回持ち込まれたワンピースドレス（試料A）に、これと共通したデザイン、素材の共に9ARと表示されたもの2枚（試料B、C）を追加し、ぴったりとして、着心地のよい既製服を選ぶ時に問題となる点を検討すると共に、特定の一着の服を身体寸法のやや異なる複数の被験者が着用することによって、身体寸法の許容範囲を見ようと試みた。



試料の組成表示はA, B, C共に表地ポリエステル100%, 裏地レーヨン100%, ただし、試料Aの上半身部は、レース地でナイロン100%, レース糸アセテート100%である。

3.2 実験方法

試料は次の方法で実験した。

(1) 人体計測と着用実験

被験者は試料Aの提供者と、日常9ARサイズ既製服を利用している学生(19歳~20歳)の中から、9名をランダムに選び計10名を被験者1~10とした。

先ず、被験者にタイツを着用させ立位正常姿勢で人体計測をし、9 ARサイズ適合者であるか否かを確認した。計測方法は「日本人の体格調査」³⁾に基づき、マルチン式人体計測器と巻尺を用いて、既製ワンピースドレスに表示してあるサイズ箇所の身長、バスト、ヒップを計測し、ついで実験に必要と思われる肩幅、背肩幅、背幅、胸幅、腕付根囲を追加計測した。

計測者は経験4年目の実習助手である。(計測の状態を図2-1～図2-3に示す)

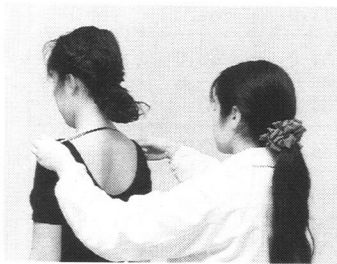


図2-1 背肩幅計測



図2-2 胸幅計測



図2-3 袖付根囲計測

計測後、ただちに被験者に各試料を交互に試着させ、静立位に於ける着装上の着心地、外観を観察吟味した。

ついで試料Aを被験者4に試着させ、「手が挙げにくい、肩が重い」などの問題を解明するため、3動作(図3-1～図3-3参照)をさせ動作時に於ける着用状態を考察した。

(2) 各試料の型紙化とゆとり量の比較

実験に用いた各試料のワンピースドレスは、上半身の縫い目を分解しボール紙上に固定化して型紙化し、被験者4が被服構成学習時に作成したD式原型とを重ねて比較し、各試料との寸法差からゆとり量の検討を行った。

3.3 結果および考察

(1) 被験者の人体計測寸法と着用実験

表6は被験者10名の人体計測寸法と9 ARサイズの適合者であるか否かを確認したものである。

各被験者の計測結果を部位ごとに9 ARサイズと比較すると、身長では被験者全員9 ARサイズである。バストでは単数表示82cmを基準に81～83cm内の者は5名である。ただし、この範囲を±2cmみれば全員の適合が認められる。体型をみると、被験者1・8番はY体型、2・6番はB体型、その他の者はA体型で6名適合が認められた。

体型区分については前章記載のように被験者らを含め、消費者の認識が充分でないといえよう。

また、同一サイズ表示であってもメーカー側の仕立て上がり寸法はゆとり量が自由であるため、試料Aのような不満箇所のすることも予想できる。従って、衣服の支持部として必要であろう肩幅、背肩幅、背幅、胸幅、腕付根囲など表示してない部位5ヶ所も追加計測し、着用実験から起こるであろう問題点解明に備えた。

表 6 被験者の身体計測値

(単位cm)

被験者	9ARサイズ	バスト	身長	ヒップ	肩 幅	背肩幅	背 幅	胸 幅	腕付根囲
		81~83	152~160	89~91					
1		80.0	158.2	88.0	12.5	37.5	34.0	32.5	37.0
2		84.0	160.0	94.0	13.5	40.0	35.0	34.0	39.0
3		82.2	157.7	88.7	12.5	38.0	34.0	33.0	37.5
4		82.0	158.5	90.0	12.5	38.0	34.5	33.0	38.0
5		83.5	158.2	91.0	12.5	38.5	34.5	33.0	38.5
6		84.0	156.6	94.0	13.0	40.0	35.0	34.0	39.0
7		83.5	158.0	91.0	12.5	38.5	34.8	33.0	38.5
8		80.5	158.5	88.0	12.5	37.5	34.0	32.5	37.5
9		83.0	157.0	90.0	12.5	38.0	34.5	33.0	38.0
10		83.5	158.0	91.0	12.5	39.0	34.5	33.5	38.0

表7は被験者の試着時に於ける着心地反応と外観評価である。

人体計測後、被験者全員に試料A, B, Cを交互に試着させ静立位で手を前後左右に軽く動かし、各被験者の身体適合状態を尋ねた。左端の外観評価は研究者が着装上の外観を評価したものである。

不満の最も多いのは試料Aで、バストが窮屈と答えた者6名、大体よい4名、全員が9ARサイズの仕

表 7 被験者の試着時に於ける着心地反応と外観評価

被験者	部位 試料			着 丈			バスト			ヒ ッ プ			肩 幅			背 肩 幅			背 幅			胸 幅			腕付根囲			外観評価														
	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C												
1				△		△						△			△			△			△	↑	↑	↓				○	△	△												
2				↓	△		↓					↓	△	△	↓	↓	↓	↓	△	△	↓			↓				×	△	△												
3				△								↓			△			↓			△			↓				△	○	○												
4				△								↓			△			↓			△			↓				△	○	○												
5				↓								↓	△		↓	↓	↓	↓			↓			↓				△	△	○												
6				↓	△		↓					↓	△	△	↓	↓	↓	↓	△	↓	↓			↓				×	△	△												
7				↓								↓	△		↓	↓	△	↓	△	↓	↓			↓				△	△	△												
8				△		△	↓					↓			△			△						↓				○	○	△												
9				↓								↓			△			△			△			↓				△	○	○												
10				↓								↓	△		↓	↓	△	↓			↓			↓				△	△	○												
記 号	記号なし=よい																								△大体よい			↑大きい			↓小さい			○よ い			△大体よい			×悪 い		

立て上がり寸法に対して疑問をもったようである。その他の部位についても全般的に小さかったが研究試料として採用した既製服でもあり、更に着用実験を行った。(後述にまわす)

試料Bでは、バストがぴったりした者8名、バスト84cmの被験者2・6番も大体よいと答えた。被験者1・8番には少しゆったりしていたが、動作が自由でよいと答えた。しかし、背肩幅が狭くて窮屈と答えた者2・5・6・7・10番で被験者の半数を占めた。

試料Cでは、バストの適合者は大体よいの2名を含めると、100%であった。大体よいの1・8番は試料Bと同様にゆったり好みに感じられた。その他の部位ではやはり背肩幅が少し窮屈で苦しいと答えた者が3名、少しいつ2名約50%の不適合が出た。

以上、3メーカーの既製服各1着を10名の被験者で試着したのみで適合度を見出すことは難しいが、消費者の立場から希望する事は表示サイズの追加、背肩幅サイズを記入してはどうかと提言したい。しかし、背肩幅が自由になるデザインの場合は別である。

次に、被験者が持ち込んだ試料Aは表示サイズ9ARではあるが、着用実験結果からみると適合しない部位が多くみられた。そこで、被験者4番に着用させ基本となる動作、上挙、前挙、後方位の3動作をさせ、身体の動きによる試料Aの弛緩、上位部のずれ具合を観察し原因を探った。

上肢最大上挙では前丈が上衣部裾線で8~9cm上にずれ、袖口は2.5~3cm引ばられ袖付根囲でしわとなる。この場合ウエスト飾りベルトはゆるくして上肢最大上挙を指示したが、上挙が苦しく困難を訴えた。(図3-1に示す。)

上肢前挙は前丈のずれは少ないが、背肩幅のゆとり量が少なく袖付根囲が背中心に引ばられ、袖付線が左右で3cm程度後へずれ前挙しにくくなる。(図3-2に示す。)

上肢後方位の動作は最も少ないが、後の物につかまる動作を想定して上位部の変化を観察したところ前挙と同様の状態が見られ、袖付線が胸幅不足のカバーをしたが、不足寸法は左右それぞれ1cm程度である。

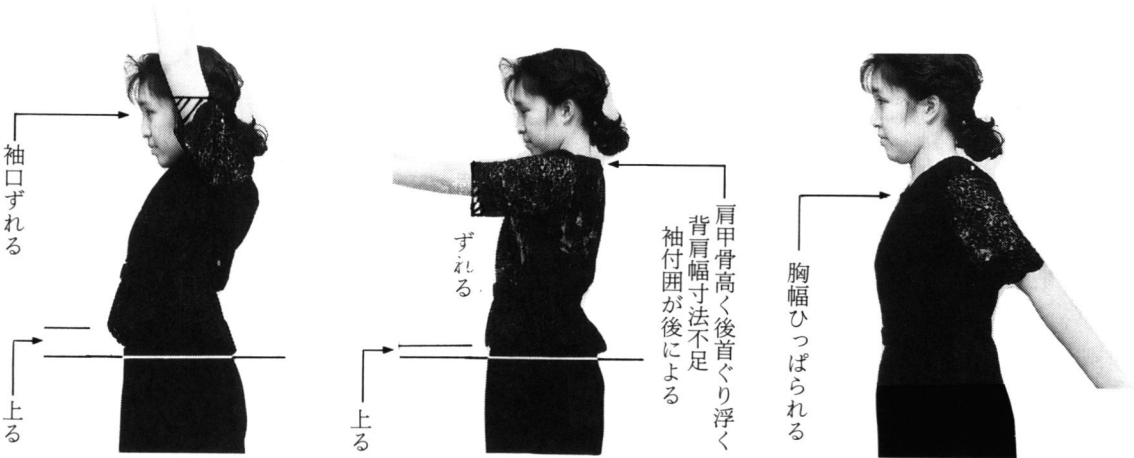


図3-1 上肢最大上挙

図3-2 上肢前挙

図3-3 上肢後方位

以上3動作実施結果からも試料Aは仕立て上がりのサイズが他の試料よりも小さいことが分かった。また、着心地の不满原因もこのことによるのではなかろうか。では、どの程度のゆとり量があれば着心地よい衣料になるか検討するために次の実験をして、必要ゆとり量を検討した。

(2) 試料の型紙化とゆとり量の比較

基本サイズ・デザイン・素材は同一であってもゆとり分量の多少により、仕立て上がりサイズが異なる。従って、着心地に微妙な変化をみることは見逃せない事実である。そこでバスト82cm+8cm(ゆとり量)のD式原型を作り、それを基準として各試料の型紙化したものと比較し、ゆとり量の算定をした。試料の型紙化は次の順序方法で実施した。

- ①各試料の上半身・袖を縫い代を延ばさないように分解した。
- ②分解した前後身ごろ、袖をボール紙上にピンで止め、縫い代を除いてルレットで写し型紙にした。
- ③製図紙上に基準とするD式原型、前後身ごろ・袖を製図ペンで写し、各試料ごとに比較できるように、前中心線、後中心線、胸幅線を揃え破線で写し、袖は袖中心線、袖幅線を揃え同様に写した。

(図4-1～図4-3参照)

上衣の原型製図はブラジャーの上から採寸した寸法を使用しているが、バストのゆるみ分量算定に使用する事は許される方法であろうと考え原型と試料の型紙を比較した。

試料Aの前身ごろは原型より2cm小さく、後身ごろは1cm大きい。

全体のゆとり量は $(-2\text{cm} + 1) \times 2 = -2\text{cm}$ $8\text{cm} - 2\text{cm} = 6\text{cm}$ のゆとり量(図4-1)

以下この方法で算出すると、試料Bは12cm、試料C12.6cmのゆとり量が入っていると考えられ、着心地反応からみてもこれだけの寸法は入っていると思われる。

次に表示サイズ外で問題の多かった背肩幅では、原型38cmに対して試料B、試料C(図4-2～4-3)共に肩先で0.5cm～0.6cm広くしてあるが、人体計測値からみると1cm前後が不足する、試料Aでは被験者2・6番では4cm前後の不足がみられ一層窮屈なことは当然である。このように規格に入っていない部位で不適合者が多くでることは、表示の対象として考慮されなければならない問題となる部位であることがわかった。

今回の試着実験、観察により同一表示の既製服でもメーカーにより仕立て上がりサイズに差があるため、表示を頼りに購入しても着用しにくい場合のあることが分かった。従って新規格サイズ表示が定着した後も、なお、バストに入るゆとり量がメーカーにより差があることを熟知した上で特定メーカーのものを選ぶ必要がある。試料B・Cのバストゆとり量12cm～12.6cmの場合は82cm表示であっても許容範囲が80cm～84cmまで可能であることが分かった。ヒップは88cm～94cmは勿論可能である。

この結果JIS L 4005(1985)に規定されたサイズ区分の間隔は適当であろうと推定されるが、恐らくは1サイズの服のカバー範囲は、1つ隣のものにまで及んでいると見ることも出来よう。

次に試着時に不適合者が多く出た背肩幅は表示外の部位である。しかし服として当然適合しなければならない部位であり衣服の支持部として重要である。そうであるならば始めから仕立て上がり寸法の中に入れ表示しておく必要はないだろうか、今後の研究課題として残される問題であろう。

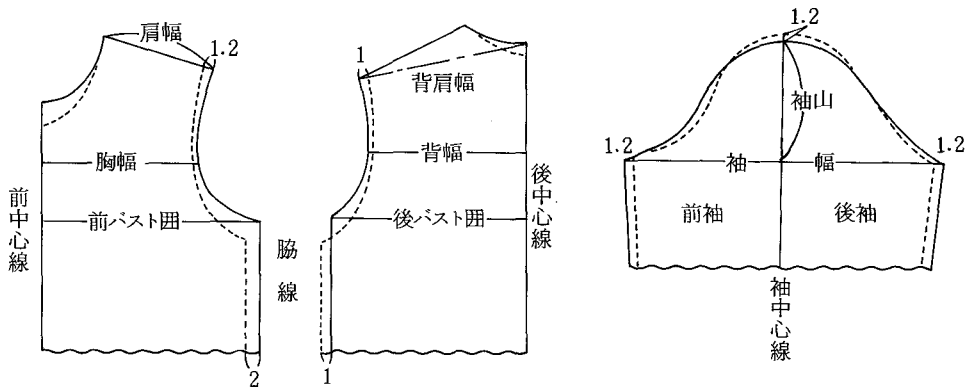


図 4-1 原型と試料Aの比較
 (原型 ————)
 (試料 - - - - -)
 (背肩幅 - - - - -)

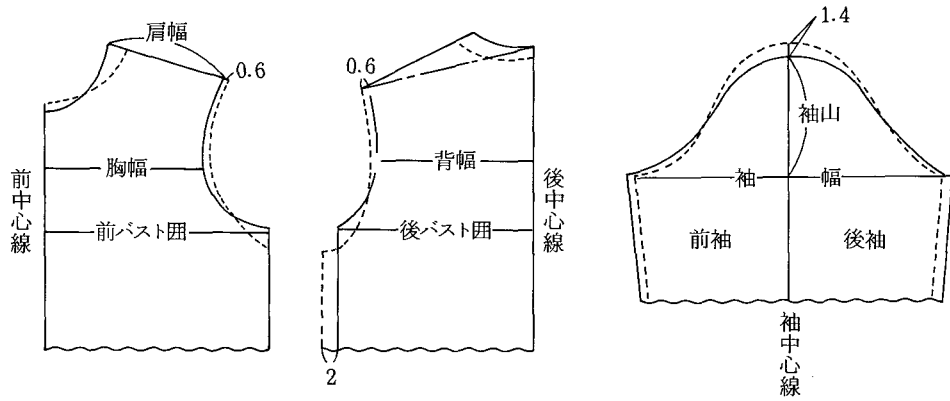


図 4-2 原型と試料Bの比較
 (原型 ————)
 (試料 - - - - -)
 (背肩幅 - - - - -)

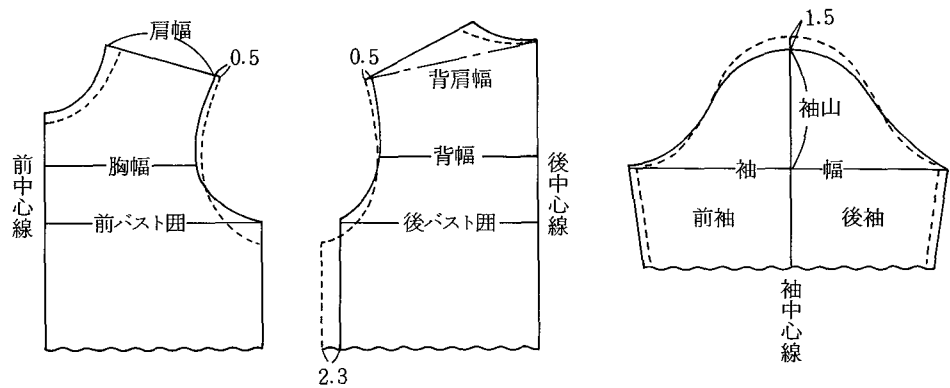


図 4-3 原型と試料Cの比較
 (原型 ————)
 (試料 - - - - -)
 (背肩幅 - - - - -)

4. 結 言

成人女子用既製衣料品の適合性を確保するために、消費者の立場からの適切な対応法について検討したところ、いくつかの知見が得られた。

(1) 調査対象者の8割以上が自己の身体寸法についてほぼ正確に把握していた。女子学生が調査の対象であったことから、このような良い結果がみられたと思われるが、消費者にとって自己寸法を正しく認識しておくことは、“ぴったり”した既製服を購入するための必要な条件の一つであろう。

(2) JISに示されている体型についての認識は不十分であった。これは、既製服に表示されている3元寸法の呼び方に対する知識の低いことが理由と思われる。関係業界は、今後積極的に消費者に対して表示サイズの啓蒙に努めてほしいものである。

(3) 自己の体つきについては、総じて「肥り」の意識が強く感じられた。

(4) 調査対象者の50%が30サイズにわたってJISの3元単数表示サイズの適用範囲にすることが示された。これはほぼ同一年齢を調査の対象とした結果である。全年齢の成人女子を対象としたのであれば、適用率はさらに低くなることが推定される。

(5) 改正規格のサイズピッチは適当であろうと考えられる。被服に入るゆとりの分量によっては、基準とされるJIS規格サイズの一つ隣のサイズまで、ある程度適用が可能になることが示唆された。

(6) 被服のゆとり量は基本サイズ・デザイン・素材は同一であっても、既製服メーカーによって差があり、仕立て上がり寸法が異なることが明らかになった。そこで、既製服の表示サイズは、基本身体寸法に加えて仕立て上がり寸法も記載されることが望ましいと考えられる。

(7) 本研究の試料では、適合不十分な問題点として背肩幅が指摘された。3元寸法以外に、既製服購入時留意すべき寸法であろう。

引 用 文 献

- 1) 矢部寿重, 井堀悦子, 大橋登史子, 三田利子, 近藤信子: 中国短大紀要, 20, 19~21 (1989)
- 2) 小池晴巳: 織消誌, 29, 48 (1988)
- 3) 日本規格協会編: 日本人の体格調査報告書, 日本規格協会, 東京 (1984)
- 4) 細谷憲政: 最新食品標準成分表, 全国調理師養成施設協会, 19 (1989)
- 5) 矢部寿重, 井堀悦子, 大橋登史子, 三田利子, 近藤信子: 中国短大紀要, 20, 23 (1989)
- 6) JIS L 4005—1985 成人女子用衣料サイズ
- 7) 赤根由利子: 土浦短大紀要, 10, 31 (1982)